

## 5. 東山温泉街に息づく神事ともてなしにみる歴史的風致

### (1) はじめに

東山温泉は、会津若松市街地の東南に位置し、一級河川である湯川の渓谷を挟んで兩岸に山々が迫る細長い谷地に形成されています。天平年間（729～749）に高僧行基が3本足の烏に導かれて温泉を発見したとする伝説が残り、行基が勧請したとされる羽黒山東光寺は、明治期の神仏分離により寺院が廃されましたが、それまでこの周辺一帯は修験道の間としても栄え、歴代藩主の厚い信仰を受けていたとされます。

『新編会津風土記』（享和3年（1803）～文化6年（1809））の記載からも、江戸時代には既に会津藩の湯治場として栄えていたことが分かりますが、修験者の集う場としての歴史はさらに古くから続いていたとされ、現在でも多くの神事が地域に根付いています。

東山温泉には11の湯口（きつね湯、猿湯など）があり、明治期以降は近郷からも湯治客が集まり、温泉街の奥にそびえる羽黒山に詣でた人たちが、精進落としと称して宴会を催す場ともなり、「奥羽三楽郷」のひとつに数えられました。

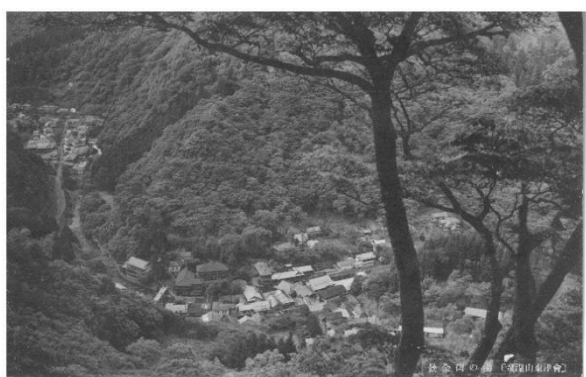
また、竹久夢二や与謝野晶子など、多くの文化人が訪れる歓楽街としての温泉街が発展していき、各温泉旅館では芸妓を置くようになり、大正末期には現在の置屋制度の原形ができたといわれます。

芸妓は、この土地の風習や風俗などの社会的要素と混じりあって熟成された芸妓文化となり、宴に花を添えてきました。

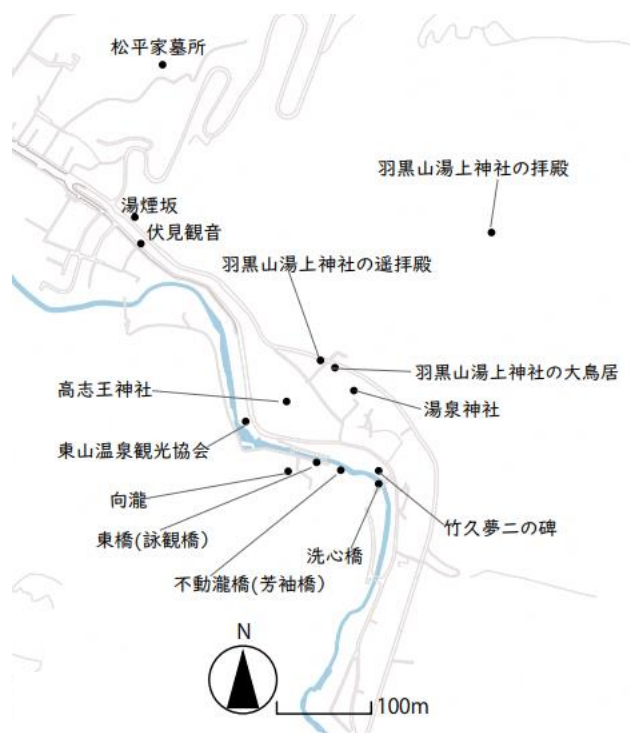
また8月には、会津東山盆踊りを複数日にわたり開催し、芸妓衆と共に観光客や地元住民などが会津磐梯山を踊る姿は、夏の風物詩となっています。



『新編会津風土記巻之三十三』  
に記載の東山温泉周辺



昭和10年（1935）頃の東山温泉街



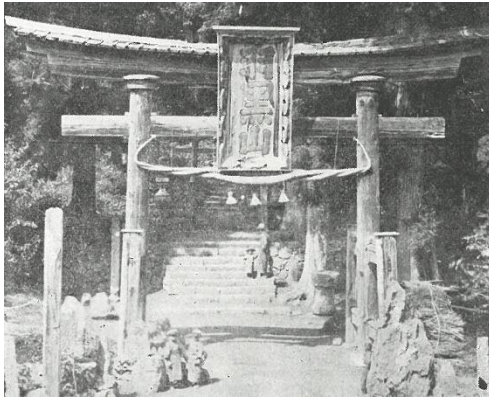
東山温泉街周辺図

## (2) 建造物等

### ①羽黒山湯上神社の大鳥居

参道の入り口は温泉街の中心部である湯本地区にあります。

間口3間、高さ4間の朱塗りの鳥居で、東山温泉を紹介する小冊子『東山仙境』<sup>ひがしやませんきょう</sup>（大正元年（1912）頃発行）に写真とともに、「羽黒山と記された大きな扁額は、江戸時代中期頃に全国的に活躍した書家であり篆刻家の三井親和による金字の経書」と紹介されています。



羽黒山湯上神社の大鳥居



現在の大鳥居

### ②羽黒山湯上神社の遥拝殿

大鳥居の後方に建造された、間口3間、奥行き2間の拝殿です。1,225段の階段を上り、羽黒山の中腹に祀られている湯上神社拝殿に参拝できない場合に訪れる場所とされます。

現在の拝殿の建設時期は定かではありませんが、建設のための土留石には明治45年（1912）と刻まれています。



遥拝殿

### ③羽黒山湯上神社の参道

拝殿に続く参道は1,225段のコンクリート造の階段です。向瀧の平田トネ、ヨネ両氏の寄進により、昭和2年（1927）に整備されたことが同年に建立された石碑に刻まれています。

また、長い参道には石碑や三十三観音の石仏が多く祀られており、神仏習合の名残がみられます。



参道と参道の途中に設けられた石鳥居

#### ④羽黒山湯上神社の拝殿

羽黒山は東山温泉街の北東に位置する標高642mの山で、中腹には養老2年（718）から天平元年（729）の創立とされる羽黒山湯上神社が祀られ、東北三大羽黒山神社の一つとされ、倉稻魂命うかのたまのみことを主祭神として祀っています。

奥の院を参詣するため拝殿であり、拝殿をさらに奥に進むと奥の院があり、現在は土台と祠が残されています。

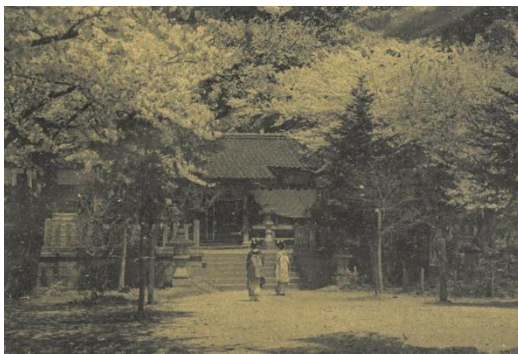
間口6間、奥行3間の拝殿の建造時期は定かではありませんが、正面に奉納された石灯籠には、安政5年（1858）10月と刻まれています。



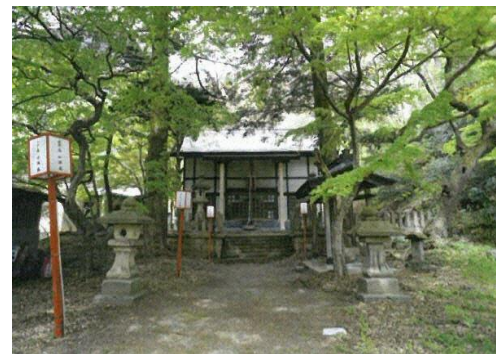
拝殿

#### ⑤湯泉神社

湯泉神社は羽黒山湯上神社の里宮として、また、東山温泉の守護神として住民から信仰されています。現在の拝殿の建設時期は定かではありませんが、玉垣に大正3年（1914）4月と刻まれています。



昭和初期頃の湯泉神社



現在の湯泉神社

#### ⑥高志王神社

創建は不明ですが、『新編会津風土記』（享和3年（1803）～文化6年（1809））には腰王神社の記載があり、鳥居前の石碑は大正14年（1925）と刻まれています。社殿は切妻、銅板葺、正面1間の造りで北向きに配置されています。

他の地域では一般的に大彦命おおひこのみことを祀っている神社が古四王神社と呼ばれることがありますが、越国こしのくにと呼ばれていた北陸地方との関係性から、越王神社が高志王神社に変わり呼ばれたと考えられています。

東山温泉街の芸妓衆が多く参拝する神社といわれています。



高志王神社

⑦<sup>むかいたき</sup>向瀧（国の登録有形文化財）

藩の指定保養所であった「きつね湯」を明治6年（1873）に平田家で引き継ぎ、創業150年を数えます。

約3,000坪の敷地を擁し、東側から玄関・本館、客室棟、新館が湯川沿いに配置され、山の斜面にも離れや客室が建っています。これらの建築物は、昭和10年（1935）以降の本格的な増築により現在の姿となりました。

玄関は、車寄の入母屋破風と二階屋根の大型の入母屋破風が重なり、懸魚や狐格子の妻飾りと相まって重厚さを醸し出しています。

昭和の増築工事は、東京の棟梁による伝統江戸工匠技術が導入され、傾斜地を活かした建物配置と庭園のレイアウトに特徴があります。



昭和7年（1932）の向瀧

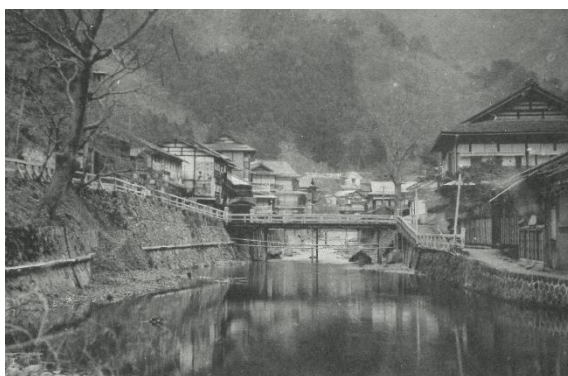


現在の向瀧

⑧<sup>あづまばし</sup>東橋

湯川に掛かる詠観橋とも呼ばれている橋で、大正2年（1913）の写真では木造の橋であったことを確認することができます。

その後、昭和27年（1952）に、いわゆる進駐軍（連合軍最高司令官総司令部（GHQ））によりコンクリート製の橋に架け替えられたといわれており、橋の欄干に竣工年月（昭和27年（1952）11月竣工）が記されています。



昭和初期頃の東橋（詠観橋）



現在の東橋（詠観橋）

### (3) 活動

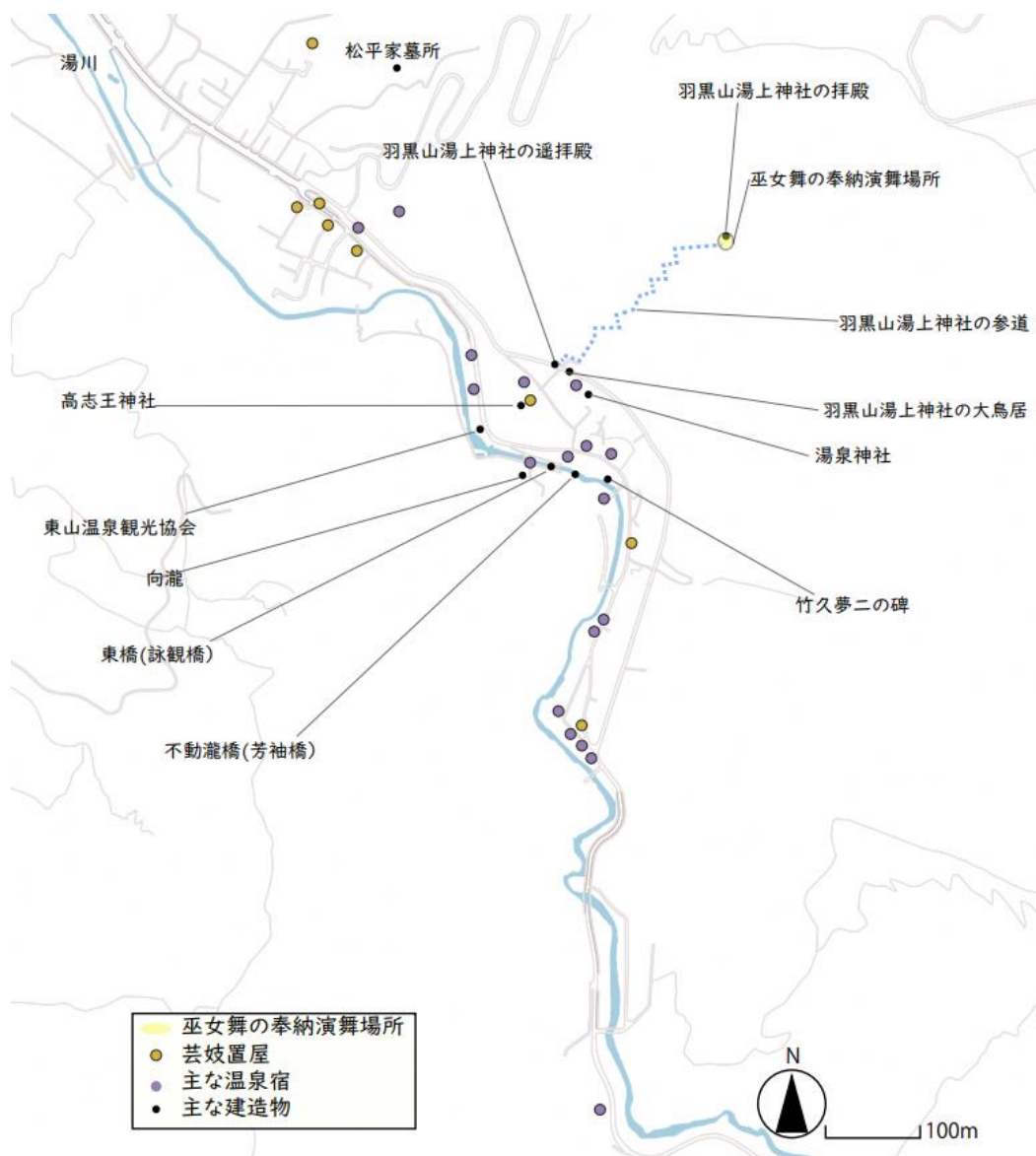
#### ①巫女舞をはじめとする神事

9月2日、3日に行われる羽黒山湯上神社の例大祭では、以前は白装束の山伏姿で1225段の参道を拝殿まで上り、お参りする風習がありました。また、子供が二歳になると男児は弓を、女児は羽子板を春の祭礼日である5月1日に納め、親が子供を背負い拝殿にお参りする、二つ見詣りが続けられていました。

巫女舞の起源は定かではありませんが、羽黒山湯上神社には明治期に撮影された写真が残されていることから、大正期以前より続けられていることが分かります。現在では、各旅館の玄関先に社を移動して行われる神主のお祓いの後、巫女による豊栄の舞の奉納が行われています。



巫女舞の様子



巫女舞の奉納演舞場所

## ②会津東山盆踊り

昭和19年(1944)に政府は、大都市学童の地方疎開を閣議決定し、東山温泉でも、東京都の小学3年生から6年生の子供たち1320人を受け入れ、疎開してきた子供たちを元気づけようと始められたのが会津東山盆踊りです。盆踊りは昭和31年(1956)8月15日の地元新聞の記事によると、当時から複数日にわたり開催され、観光客と地元住民と一緒に踊り、とても賑わっていた様子が伝えられています。会場には、温泉街の中央を流れる湯川に盆踊り演奏に用いる高さ約14mの櫓が掛けられ、川の周りを側道及び上流、下流の橋を回るルートで盆踊りが行われてきました。現在は、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、令和2年(2020)から令和4年(2022)まで開催されていない状況が続いています。



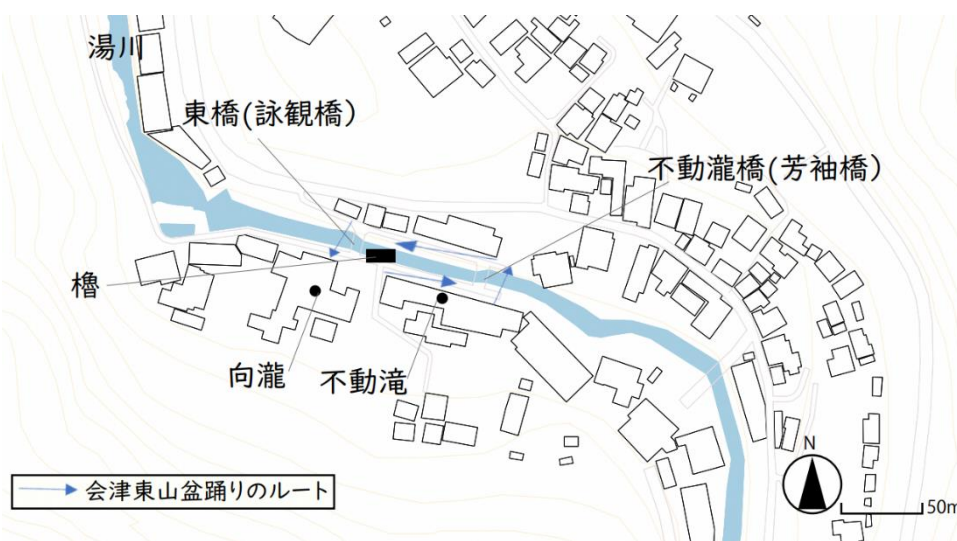
向瀧に疎開中の子供たち  
昭和19年(1944)



会津東山盆踊り会場  
(東橋側より上流を望む)



会津東山盆踊りチラシ



会津東山盆踊り開催地 周辺図

### ③芸妓文化

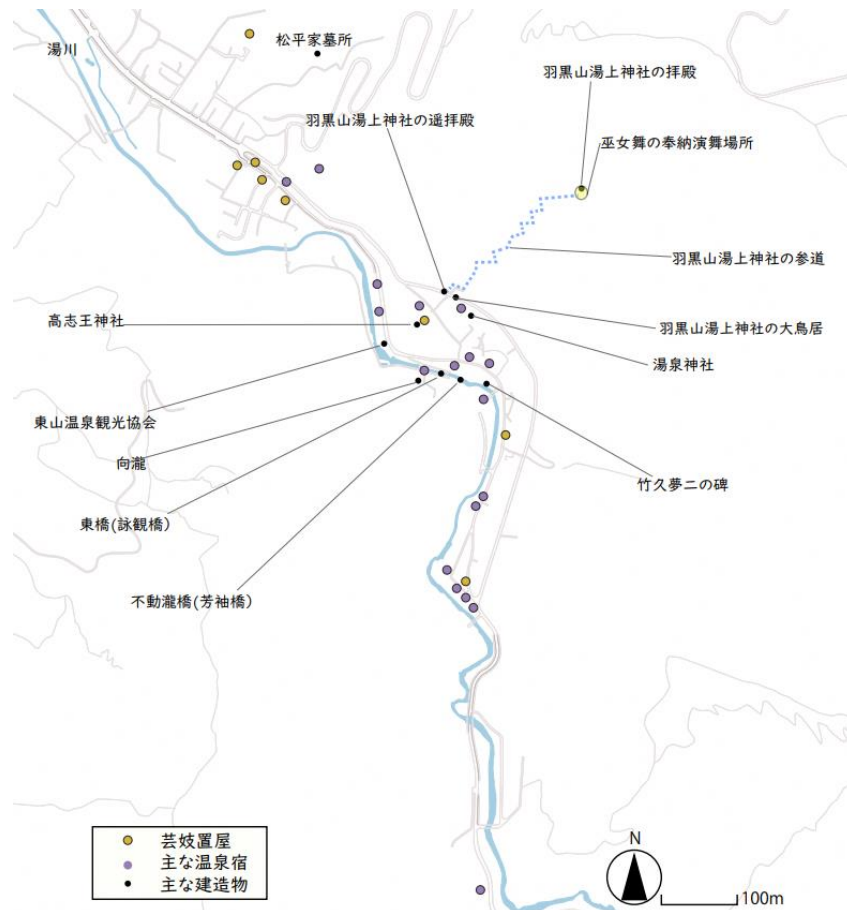
東山芸妓のはじまりは明確ではないものの、明治39年（1906）発行の『東山温泉誌』において、各宿に「内芸者」とみられる者の写真が複数紹介されていることから既に存在していたと考えられます。現在の東山温泉における芸妓文化は、会津若松市内で花街を形成していた栄町や七日町における芸者が基となり置屋制度をつくり、東山温泉街において市内の花街の芸風や所作、唄の文句や三味線技法などが混ざり合いながら作り上げられたことで、現在の東山芸妓の基が築かれたといわれています。



芸妓の様子

東山温泉に本格的な芸妓置屋が出来たのは昭和10年（1935）頃で、昭和32年（1957）には、東山芸妓芸妓屋組合が発行した「東山芸妓組合員証」が残されていることから既に組織化されていたことが分かります。昭和52年（1977）に東山芸妓屋組合が設立され、平成15年（2003）には一般社団法人東山温泉芸妓屋協同組合として新たに組織化されました。

東山温泉は、昭和50年（1975）から平成5年（1993）に観光客のピークを迎え、最盛期となる昭和54年（1979）には、置屋数49軒、芸者数150名で、宴席があると置屋から旅館等へ、「カランコロン」と音を立てながら歩く姿がみられましたが、現在では芸妓衆が年々減少し、置屋数10軒、芸者数は17人となっています。



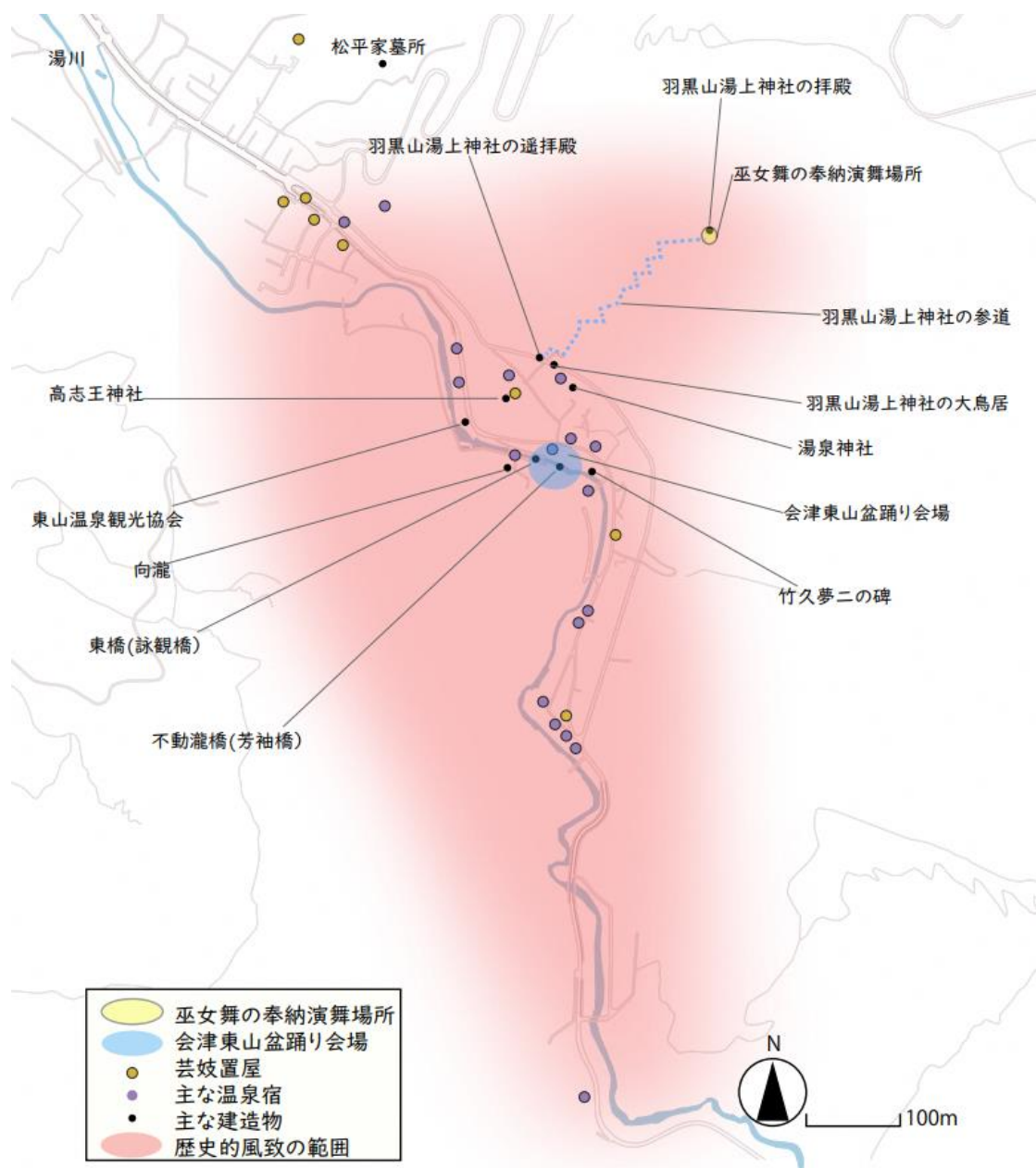
芸妓置屋の位置

#### (4) おわりに

本市の奥座敷として現在は多くの観光客で賑わっている東山温泉ですが、この周辺一帯は修験道の場として開かれ、蘆名直盛が城を黒川の地に築いた頃から歴代藩主の厚い信仰を受けて温泉場として賑わうようになり現在まで続いています。

また、昭和19年(1944)第二次世界大戦の末期に東京から疎開してきた子供たちを励ますために開催された盆踊りは、今では住民と観光客が楽しみながら交流することのできる夏の風物詩となって今日まで続いています。

さらに、明治期以降より続く芸妓の文化も色濃く残り、数は少なくなりましたが、置屋から依頼のあった宿まで、下駄を「カランコロン」と鳴らしながら歩く東山芸妓の様子は旅情を感じさせ、羽黒山湯上神社や湯泉神社の社殿、向瀧や東橋の歴史的建造物は、現在も多くの人で賑わう温泉宿や風情を感じさせる街なみと一体となり、歴史的風致を形成しています。



歴史的風致の範囲



## 【コラム「東山お湯かけ祭り」】

毎年8月10日に地元温泉街の若衆・芸妓衆や地元の子供たちが、神輿を担ぎ、東山温泉街を練り歩きながら、各宿の宿泊客から温泉のお湯をかけてもらうお祭りで、芸妓衆がまだ100人以上いた、昭和50年（1975）頃から続く温泉に感謝する祭りです。

神輿の上に若衆姿の芸妓2名が前後に乗り各旅館を巡ります。

各旅館では予め門前にお湯（温泉）を汲み置き、巡ってきた神輿に向かって柄杓ひしよくを用いて振りかけます。お湯が滝のように降りそそぐなかを「ワッショイ ワッショイ」と、威勢のよい掛け声が温泉街に響き渡ります。

このとき、神輿から縁起物として湯銭がまかれます。縁起物である湯銭は予め温泉神社で浄められたもので、当日はまかれた湯銭を求める人で賑わいます。5円玉に紅い紐は縁結び、50円玉に白い紐は長寿、5円玉、50円玉に金色の紐は金運の湯銭としてまかれ、神輿を担ぐ者、湯銭をまく者、湯銭を拾う者、みなが全身ずぶ濡れとなります。



お湯かけ祭りの様子